

ダンスの学習指導における集団討議の方略に関する研究

— 満足度と発言量を中心に —

畑 野 裕 子
飯 村 英 子

I 緒言

学校教育における創作ダンスの学習指導は、集団学習場面で行われる場合が多い。根木ら²⁾は、大学生の集団によるダンス創作の問題点が、身体活動に入る以前になされる作品のテーマ設定段階において、特に多いと報告している。創作ダンスの学習指導過程では、身体活動に伴う技術学習指導もさることながら、このような集団討議をいかに充実したものにするかという観点も重要であろう。討議により決定された作品のテーマや表現内容が、確かに集団成員全員の関与によって十分に討議されて決定されたものであるか否かということは、後に続く創作活動への成員の取り組みに大きな影響を及ぼすものと考えられる。

そこで本研究は、創作ダンス学習指導での集団活動における成員の満足度と発言量を高めるための学習指導方法を明らかにする一資料として、特にそのテーマ（発散的特性を持つ課題）設定段階（本研究で述べるテーマ設定段階とは、根木ら²⁾の研究をふまえ、題材を選択し、イメージを浮かべ、最終的に表現内容を決定する段階を含めたものとする。）における集団討議を効果的に成立させる条件を明らかにしていくことを目的とする。ダンス創作過程の中でも、ダンスのテーマに関してイメージを集団で話し合っ決めてという学習過程は、

テーマ・表現内容産出段階：集団の成員が考えた表現内容に関するイメージやアイデアをできるだけ多く出し合う（発散的思考）段階 と、

テーマ・表現内容決定段階：出されたアイデアの中から、あるイメージの表現内容に絞っていく（収束的思考）段階 に分けてとらえられる。

すなわち、このような学習過程において、集団の成員の満足度を高めるような学習指導方法を、以下の2方略¹⁾(㉑ IGs : individual to group strategy, ㉒ Gs: group strategy)と、2条件(㉑ ブレインストーミング条件：Brain storming, ㉒ ノンブレインストーミング条件：Non Brain storming)の組み合わせにより、どの段階でどのような方略・条件が有効であるかを検討することを目的としている。

II 方法

1 対象者：H大女子学生「一般体育実技ダンス」履修者48名、各6名づつ、計8集団。

2 方略・条件：方略・条件は、表1に示す通りであり、発散的思考段階、および収束的思考段階における討議の方略・条件は、次の2タイプを設定した。

IGs：最初の3分間は集団成員各自が単独で問題解決に取り組み、それに続く10分間を集団成員全員で討議する問題解決ストラテジー。

Gs：13分間、終始一貫して集団成員全員で討議する問題解決ストラテジー。

発散的思考段階における討議の条件で、本研究におけるブレインストーミング的手法はOsborn³⁾に準じた。

3 討議課題：ダンスを創作するのに題材（例：雪）をどのような表現内容にするか、まず、発散的思考段階において集団ごとにてできるだけ多くのアイデアを出し、次に、収束的思考段階でそれらの表現内容に関するアイデアをまとめ、集団として最終的に1つの表現内容を決定することを課題とした。

4 測定尺度

1) 満足度測定尺度：集団討議後の各自の満足度を測定するために、「課題」「討議過程」「他成員」の3次元についてリッカートタイプ・5ポイントスケールの評定尺度を構成した。

2) 討議過程における成員の発言分析カテゴリー：アイデア・意見、方向づけ、評価、課題無関連

5 手続き
進行係は、個人思考、集団思考（Gs：集団思考のみ）の各セッション前に課題内容とルール、制限時間を教示し、BS条件の場合には成員が出したアイデアをすべて模造紙に記録した。すなわち、まず討議課題を与え、その集団の発散的思考段階における方略と条件に関する教示を行った。IGs方略でBS条件を行った場合の具体的な教示内容は次のようである。「ダンスを創作するときは、テーマを決めて、そのテーマの表現内容に関するイメージをふくらませます。今から雪という題材について、それをどんなテーマや表現内容にするか

表1 集団討議方略の組み合わせ

| | 発散的段階 | | 収束的段階 | |
|-----|---------|---------|---------|--|
| | 発散・方略条件 | 発散・BS条件 | 収束・方略条件 | |
| IGs | | BS | IGs | |
| | | | Gs | |
| | | NBS | IGs | |
| | | | Gs | |
| Gs | | BS | IGs | |
| | | | Gs | |
| | | NBS | IGs | |
| | | | Gs | |

IGs: Individual to Group strategy Gs: Group strategy
BS: Brain Storming NBS: Non Brain Storming

を考慮してほしいのです。そのために、今回は、2つのステップを踏んでもらおうと思います。第1のステップは、テーマを与えられたら、先ず3分間個人で黙って考えてもらいます。紙に書きたい人はこの用紙を使用して下さい。この3分間は他人と話さないようにします。次のステップは、集団で話し合っているべくたくさんのアイデアを出してもらいます。その際、4つのルールに従って話し合ってください。1つめに、他人のアイデアを絶対に批判しないこと。2つめに、自由奔放なアイデアを歓迎します。3つめに、アイデアの質よりも量を求めます。4つめに、他人のアイデアを進展させるような意見を歓迎します。つまり、他人の批判は避けてなるべくたくさんのアイデアを出しましょうということです。なお、出てきたアイデアは全部模造紙に記録していきます。第2ステップ、つまり集団での話し合いの時間は、10分です。

発散的思考段階の討議終了後、直ちに満足度の評定を求め、次に、各集団の収束的思考段階における方略と条件の指示を行った。収束的思考段階の討議終了後、直ちに満足度の評定を求めた。討議の様子は、すべてVTR、オーディオ・カセットレコーダで録画、録音した。

Ⅲ 結果と考察

発散的思考段階

1. 満足度(表2)：分散分析・下位検定⁵⁾の結果、BS条件の方がNBS条件よりも「討議過程」に対する満足度が有意に高かった。集団討議においてブレインストーミングを用いた場合は、成員が自由に発言することができ、自己の意見を批判されることはない。つまり、討議過程がブレインストーミングを用いない場合とは異なってくる。このことから、ブレインストーミングを用いた場合は、用いない場合に比べ、「討議過程」に対する満足度が高くなることが十分予測され、本研究の結果は妥当なものと考えられる。

2. 発言量(表3)：発言分析カテゴリー(カテゴリー別発言量(個人のカテゴリーごとの発言量(10文字を1単位で換算)に1を加え常用対数により対数変換したもの))によって分析された集団成員の発言量に基づき、分散分析・下位検定を行ったところ、Gs条件の方がIGs条件に比べ評価的発

言量が有意に多く、さらに、NBS条件の方がBS条件に比べ方向づけに関する発言が多い傾向が認められた。ところで、討議の観察によると、すべての群が発散的思考段階においては終始討議を続けていたことが確認され、実質的に討議時間の長いGs条件の方がIGs条件よりも発言量が多いことは当然のことであり、これらの測定値をそのまま比較することには問題がある。そこで、発言量を討議時間の割合で同等に(すなわち、Gs条件の発言量に10/13を乗じ、IGs条件と同様10分間の討議時間であるように)補正し再分析したところ、「アイデア」の発言量はIGs条件の方がGs条件よりも多い傾向にあった。これは、杉江ら⁴⁾の研究結果と一致し、発言量に関する仮説を部分的に支持するものと言える。ここで、条件との交互作用が見られなかったことについては、ブレインストーミングの特性から次のように考察する。つまり、ブレインストーミングにおいては質よりも量を求めている。ここで被験者の発言を検討した場合、Bs条件における「アイデア」に関する発言は、その多くが具体的名詞などの「単語」で行われており、NBS条件では、主語・述語を伴う「文」の形で行われていたことが確認された。しかしながら、本研究においては、NBS条件における「文」的発言をBS条件における「単語」的発言と同等の意味単位に分解し、数量化することは困難であると判断し、一律に発言された言葉をひらがなに換算し、10文字を1単位として数量化した。これらの点を考慮すれば、BS条件による「アイデア」に関する発言量は、実際には結果に示された値よりも多かったと考えられる。アイデアの発言量に関するこのような数量化の方法が結果として、方略(IGs, Gs)×(BS, NBS)の交互作用を有意に至らしめなかった1つの原因と考えられる。

収束的思考段階

1. 満足度(表4)：分散分析の結果、Gs条件よりもIGs条件の方が満足度が高い傾向を示した。また、下位検定を行ったところ、NBS条件では収束的思考段階におけるIGsよりもGsの方が満足度が高かった。満足度の次元ごとに検討すると、特に「討議過程」の次元において上述の交互作用が顕著であった。つまり「討議過程」に対する満足度は、発散的思考段階がBS条件であった場合は、IGsで収

表2 発散的思考段階における方略・条件別にみた満足度の平均値と(SD)

| 発散・方略 | 発散・条件 | 課題 | 討議過程 | 他成員 |
|-------|-------|-----------|------------|------------|
| IGs | BS | 3.82(.75) | 4.17(.45) | 3.86(.66) |
| | NBS | 3.75(.70) | 3.55(.70) | 3.81(.68) |
| Gs | BS | 3.67(.66) | 4.20(.55) | 3.62(.66) |
| | NBS | 3.58(.88) | 3.60(1.38) | 3.61(0.23) |

表3 発散的思考段階における方略・条件別にみたカテゴリー別発言量と平均値と(SD)

| 発散・方略 | 発散・BS | アイデア | 方向づけ | 評価 | 無関連 |
|-------|-------|----------|----------|----------|-----------|
| IGs | BS | .81(.39) | .20(.34) | .13(.11) | .04(.12) |
| | NBS | .79(.60) | .30(.35) | .24(.30) | .07(.16) |
| Gs | BS | .77(.34) | .12(.12) | .36(.19) | .02(.08) |
| | NBS | .66(.48) | .42(.54) | .50(.42) | 1.77(.25) |

表4 発散的思考段階における方略・条件 × 収束的思考段階における方略・条件別にみた満足度の平均値と (SD)

| 発散・方略 | 発散・条件 | 収束・方略 | 課題 | 討議過程 |
|-------|-------|-------|------------|-----------|
| IGs | BS | IGs | 2.73(.79) | 4.20(.38) |
| | | Gs | 3.97(1.05) | 4.07(.84) |
| | NBS | IGs | 4.17(.48) | 4.20(.59) |
| | | Gs | 4.30(.49) | 4.20(.71) |
| Gs | BS | IGs | 3.83(.67) | 4.30(.59) |
| | | Gs | 3.27(.30) | 3.63(.74) |
| | NBS | IGs | 3.33(.47) | 2.80(.68) |
| | | Gs | 4.40(.31) | 4.63(.59) |

表5 発散的思考段階における方略・条件 × 収束的思考段階における方略・条件別にみたカテゴリー別発言量の平均値と (SD)

| 発散方略 | 発散条件 | 収束方略 | アイデア | 方向づけ | 評価 | 無関連 |
|------|------|------|-----------|----------|----------|----------|
| IGs | BS | IGs | 1.18(.53) | .19(.42) | .22(.39) | .00(.00) |
| | | Gs | .32(.28) | .52(.19) | .31(.27) | .16(.20) |
| | NBS | IGs | .93(.66) | .36(.51) | .15(.18) | .08(.12) |
| | | Gs | .64(.64) | .56(.47) | .37(.42) | .00(.00) |
| Gs | BS | IGs | .95(.29) | .49(.36) | .45(.29) | .19(.19) |
| | | Gs | .14(.21) | .02(.17) | .08(.04) | .00(.00) |
| | NBS | IGs | .47(.64) | .39(.76) | .17(.27) | .02(.04) |
| | | Gs | .68(.33) | .52(.22) | .47(.25) | .00(.00) |

束した方が高く、NBS条件であった場合はGsで収束した方が高かった。

2. 発言量(表5):分散分析・下位検定の結果、発散的思考段階でBSを行った場合には収束IGsの方が収束Gsに比べ、収束的思考段階における発言量が多い傾向にあった。また、「アイデア」に関する発言が高い傾向であり、「アイデア」の発言量はIGsで収束した方がGsで収束するよりも有意に多かった。さらに細かく検討すると、発散時にブレインストーミングを行なった場合はGsを用いて収束するよりも、IGsを用いて収束した方がアイデアに関する発言量が多かった。これは、ブレインストーミングにおいては、産出されたアイデアはすべて模造紙に記述され、収束の段階において各集団成員は必要に応じそれらを参考にすることができた。そのために、成員は発散的思考段階で案出された多くのアイデアを把握しながら個人セッションを送ることができ、BS-収束IGsでIGsが持つ正の側面が強調され、NBS-収束IGsに比べアイデアに関する発言量が多かったと考えられる。このことは、先に述べたBS-収束IGsの場合の「討議過程」における満足度が高かったこととも一致する。

以上、得られた主な結果を考察したが、本研究にはいくつかの問題点が含まれている。各方略・条件に割り当てた集団の数が少なかったこと、集団成員のダンス経験やダンスに対する興味が十分に統制できなかったこと、実験授業の日程が4週間に渡ったことなどから、構えの異なる学生がいた可能性があること、さらには、実際のダンス創作・鑑賞の分析ができなかったこと等を指摘できる。しかしながら、次の2点に関しては本研究のデータによって保証されるものと考えている。すなわち、創作ダンスのテーマ設定段階における集団討議を効果的に成立させる条件に関し、

1. 発散的思考段階において、ブレインストーミングを用いれば、討議過程を充実させ、成員の満足度を高めることになる。

2. 発散的思考段階において、ブレインストーミングを用いれば、収束的思考段階においてgroup strategyよりもindividual to group strategyを用いた方が満足度・発言量において優れる。

本研究は、学校教育における創作ダンスの学習指導を念頭におきながらも、実際の被験者は大学生を対象としたものであった。小学生または中学・高校生を対象とし、実際の学習指導過程の中で身体表現を伴う集団討議のストラテジーを再検討すること、さらには、発散的思考段階ならびに収束的思考段階の流れを十分考慮した検討等を今後の課題とする。

IV 文 献

- 1) 石原和博「集団問題解決学習における解決ストラテジーの研究」兵庫教育大学大学院学校教育研究科修士論文, 1985.
- 2) 根木富久子・辻元早苗「舞踊創作過程の研究」東京学芸大学紀要第5部門, 31, 251-263, 1979.
- 3) Osborn, A. F., (上野一郎訳) Applied imagination, New York: Creative Education, 1939. 独創力を伸ばせ, ダイヤモンド社, 1971.
- 4) 杉江修治・市川千秋・藤田達雄・塩田芳久「集団問題解決における解決ストラテジーの研究」実験社会心理学研究, 18, 105-11, 1979.
- 5) 山内光哉「3要因混合計画(1要因が繰り返しの測定値の場合)におけるおもみづけられない平均値分析法の単純効果の検定について」九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), 22-2, 53-67, 1978.